

で遣つて来て、とき／＼に何處へか出たり這入つたりして、夕方になると屹と一緒に繋が

つて歸つて行く。どう考へてもこりやあ唯の侍ぢやああるめえ。

さうよなあ。おい、龜。こいつは些と變だぜ。

む、些とをかしい。(考へて)偽者かな。

さうよ。わかり切つてゐるぢやねえか。奴等は侍の振りをして何か仕事をしてゐるに相

違ねえ。なんでも書間はこゝの二階にあつまつて、こそ／＼と下相談をして置いて、夜に

なると暴つほいことを遣るんだぜ。

このごろは世の中がさう／＼しくなつて来て、黒船を征伐するから軍用金を出せなんて、

體のいゝ押借りや強盗を働いて、方々を嚇かしてあるく奴がだん／＼に殖えるやうだが、

奴等もやつぱりその同類かな。

一二日前の伊勢屋の一件は、的切りあいつ等と既んでゐるのだ。

さあ。さうなると、まつたく打つちやつちやあ置かれねえわけだ。おい、熊。お前にしち

やあ近來の掘出し物らしいぜ。

へん、どんなもんだ。これから些とおれのところへ修業に來い。

幸次郎。  
龜吉。  
熊藏。

龜吉。

熊藏。

幸次郎。

熊藏。

龜吉。

二人。

熊藏。

熊藏。

龜吉。

幸次郎。

熊藏。

幸次郎。

幸次郎。

熊藏。

龜吉。

(熊藏は上のかたの戸棚を二つ三つ明けて見る。龜吉と幸次郎も起つて覗く。そのうちに熊藏は一つ  
の戸棚から濃い藍染の風呂敷包みを持ち出して來る。)

む、それか。

これだ、これだ。

早く明けてみる。

湯屋の二階



熊藏。

(熊藏は風呂敷をあけると、そのなかから更に崩黄の風呂敷につゝんだ一つの箱が出る。)

(熊藏は再び崩黄の風呂敷をあけると、溜塗りの古い箱が出る。箱はその底から薄黒い平打の紐をくゞらせて、蓋の上で十文字に堅く結んである。熊藏はすぐに箱の蓋をあけると、中にある品は魚の皮とも油紙とも判らないものに包まれてゐる。)

龜吉。

べらぼうに嚴重だね。なんだらう。

幸次郎。

なんだらう。

(熊藏はその包みをあけると、年を経た獸の骨髄らしい物があらはれる。三人は奇異の感に打たれてたがひに顔を見あはせる。)

熊藏。

妙なものだぜ。

龜吉。

なんの骸骨だらう。

幸次郎。

どうも獸物らしいぜ。

熊藏。

む。 (團扇の柄でこつこつ叩いてみる。) なんだかわからねえが、獸物の頭らしいな。

(三人はしばらく黙つて、その怪しい骨髄をながめてゐる。)

幸次郎。

あいつ等は香具師ぢやあねえかね。こんなものを持ちあるいて、觀世物の種にでもするんぢやああるめえか。

龜吉。

だつてお前、觀世物師が侍のなりをしてゐるといふお茶番はあるめえ。

熊藏。

さうだ、さうだ。侍のなりをしてゐる觀世物師は世間にあるめえ。こいつはなか／＼判ら

ねえ。どうも變だな。

龜吉。

まつたく變だな。

(三人は又だまつて骨髄をながめてゐると、下では番臺の柝の音がきこえる。)

熊藏。

(氣がついて。) 男湯か、女湯か。ひよつとこゝへ誰か上つて來やあしねえかな。

熊藏。

(熊藏は起つて階子の下をのぞく。龜吉と幸次郎はあわて、骨髄を箱に入れて風呂敷につゝむ。)

(二人をみかへる。) おい、來るぜ、來るぜ。早くしろ、早くしろ。

(龜吉と幸次郎は好加減に箱をつゝんで、早々に元の戸棚へ押込む。階子の口からお吉は先に立ち、高島庄右衛門、三十二三歳、やはり藩中らしい風俗にて出づ。それをみて、龜吉と幸次郎は元のところに復つて素知らぬ顔をしてゐる。熊藏は庄右衛門に會釋する。)

熊藏。

いらつしやいませ。お暑うございませ。

湯屋の二階



庄右衛。

どうも暑いな。

(庄右衛門は大小をお吉にわたして坐る。熊藏はそれを鳥渡見て、龜吉と幸次郎にも下へ来いと眼で知らせながら階子を降りてゆく。)

お吉。

お羽織をお取りください。

(庄右衛門は羽織をぬぎ、お吉は疊んでゐる。)

龜吉。

(幸次郎をみかへる。)

幸次郎。

あゝ、さうしませう。大分おしやべりをしてしまひました。

お吉。

(二人は階子を降りてゆく。庄右衛門は扇を使ひながら其處らを見まはしてゐる。)

庄右衛。

どうぞお袴をお取り遊ばして……。

お吉。

むゝ。それよりも先づ茶を汲んでくれ。

(お吉は茶を出し、團扇を出す。)

庄右衛。

すこしお前に聞きたいが、このごろこの二階へ二人連れつづの若い侍は来ないかな。

お吉。

お武家様でございますか。

庄右衛。

どちらも年のころは二三四で、藩中者らしい風俗をいたしてゐる筈だ。

お吉。

お名前はなんと仰しやいます。

庄右衛。

名前は……。(少し躊躇して。)いや、名前を聞かずとも大抵この當りがありさうなものだ

が……。どつちも若い侍で、ひとりひとは色の白い丸顔の男だ。

さあ。(わざとらしく考へてゐる。)

お吉。

心當りはないか。これ、正直に云つてくれ。

お吉。

はい。

庄右衛。

おまへは何かその二人に口止めでもされてゐるのではないか。

お吉。

いゝえ、さういふわけではございませんが……。はて、どなたでございませうか。(矢張り

考へてゐる。)

(庄右衛門は紙入れから銀を出し、ふところ紙につんで遣る。)

庄右衛。

少しばかりだが、これは茶代だ。

お吉。

(有難迷惑のやうな顔をして。)どうも有難うございます。

庄右衛。

そこで、別に何もむづかしい詮議をするわけではない。唯その侍達がこのへ来るか来ない

湯屋の二階



か。それを教へてくれ、ばい、のだ。(お吉の顔を見て。)来るだらうな。

お吉。(困つて。)さう仰しやれば、そんなお方が……。時々お見えになるやうにも存じます。

庄右衛門。時々来るのか。(念を押すやうに。)毎日は来ないか。

お吉。毎日お出でにはなりません。

庄右衛門。ほんたうかな。(考へる。)これ、だましてくれるなよ。

お吉。(おどくしながら。)決してそんなことはございません。

庄右衛門。(又かんがへてゐる。)さうか。

お吉。(不安らしく。)あなたは何かそのお武家様に御用があるのでございますか。

庄右衛門。(曖昧に。)用があると云ふでもないが……。して、その二人はきのふも今日も来なかつたか。

か。

お吉。(おなじく曖昧に。)はい。

庄右衛門。屹と来なかつたか。

(お吉はなんと返事をしてよいかと迷つてゐる。湯屋の女房おとよは、筋と二階へ来て、階子のあがり口から窺つてゐる。)

庄右衛門。

いや、来てゐたに相違あるまい。(少しく屹となつて。)これ、隠さずに申せ。

(云ひかけて不圖おとよと顔をみあはせ、庄右衛門は俄に口をつぐむ。おとよは、これ隠しに會釋しながら、わざと二階へあがつて来る。)

おとよ。御免くださいまし。はて、こゝらには無いやうだが……。そこらを見まはす。

お吉。おかみさん、なんですえ。

おとよ。今のお客さまが二階に烟草入れを忘れて来たと仰しやるんだが……。

お吉。烟草入れ……。そんなものはありませんでしたよ。

おとよ。どうも無いやうだねえ。

(おとよは庄右衛門を横眼に見ながら、そこらを探してゐる。お吉も一緒にいつて見まはす。庄右衛門は黙つて考へてゐる。番臺の柝の音きこゆ。)

幕



第三幕

一

芝、日蔭町の刀屋、會津屋の店先。軒には會津屋といふ暖簾をかけ、刀劍御師の看板もかけてある。店の上のかたは帳場格子にて、壁には帳面などを掛け、下のかたには白鞘または拵へ付きの刀が掛けてある。それにつゞいて細工場のあるころにて、眩かけ窓に簾がおろしある。店の下のかたには町家がつゞいて見ゆ。

(帳場格子のうちには主人石見、法體のすがたにて大きい眼鏡をかけ、帳面を繰つてゐる。番頭伊兵衛は店火鉢の前に坐つてゐる。若い者千吉は襷をかけて刀をぬぐつてゐる。小僧は往來に水をまいてゐる。燈籠屋は店のまへに荷をおろし、會津屋のむすめお千代が燈籠を買つてゐる。)

お千代。

(二つの切子燈籠を把る。) ねえ、お父さん。どつちがいゝでせう。

石見。

(見かへる。) まあ、どつちでもいゝから、なるたけ安い方にして置け。

お千代。

でも、今年はお母さんの新盆ぢやありませんか。

石見。

さうだな。では、まあ、おまへが好いと思ふのを買つておけ。

お千代。

これにしませうか。(大きい燈籠を見せる。)

石見。

むゝ。よからう、よからう。

燈籠屋。

(石見はそのまゝ、帳面を繰つてゐる。お千代は帯のあひだから巾着を出して錢をやる。)

伊兵衛。

はい、はい。ありがたうございます。

燈籠屋。

燈籠屋さん、儲かるかね。

千吉。

この節は元が高くなつてゐるので、ほんのお取次ぎでございませうよ。

燈籠屋。

いえ、ほんたうのことです。それでもお天氣だけがまあ合せといふもので……。(荷をかつぐ。) どうも有難うございました。燈籠や、燈籠……。(呼びながら下のかたへ去る。)

小僧。

(燈籠をみて。) 随分大きい燈籠ですね。

お千代。

お前、水をまいてしまつたら、踏み臺をして掛けておくれよ。

小僧。

はい、はい。

(お千代は燈籠を持ち、小僧も附いて店の奥に入る。)

湯屋の二階



石見。

(伊兵衛に。)番頭さん。この帳面にある本多様のお仕事はもう出来てゐますかな。

伊兵衛。

はい、はい。これでございます。(千吉の刀を指さす。)

石見。

あのお屋敷は殿様から御用人までが気が短い、出来あがつたら早くおとどけ申して下さいよ。

伊兵衛。

かしこまりましたでございます。

源五郎。

(下のかたより梶井源五郎、笠をかぶり、細長い風呂敷包みをかゝへて出づ。)

伊兵衛。

(暖簾をみて。)會津屋はこゝだな。(笠をぬいで店に腰をかける。)

千吉。

入らつしやい。(千吉に。)小僧にさう云つて早くお茶を差上げろ。

伊兵衛。

はい、はい。(刀を仕舞つて奥に入る。)

源五郎。

どうもお暑いことでございます。

伊兵衛。

このごろは忙がしいだらうな。

伊兵衛。

御承知の通り、手前どもの商賣は別に盆前が忙がしいと云ふこともございませませんが、黒船

源五郎。

以来、世間がなんとなく騒々しくございしますので……。

源五郎。

その騒々しいのがお前たちの仕合せで、刀劍鎧かぶと、すべての武器馬具を賣る店はどこ

石見。

も繁昌するさうだ。おまへ達に取つては黒船大明神であらう。(笑ふ。)

(帳場を出て挨拶する。)これは入らつしやいまし。唯今のお詞ではございしますが、世の中の

さうぐくしいのは矢はり禁物でございます。此頃のやうに物騒になりましたは、夜も安心

しては寝られません。

源五郎。

そんなに物騒かな。

石見。

やれ黒船を焼撃しするとか、異人館へ斬込むとか。その軍用金を云ひ立てにして、諸方へ

押借りや強盗が押込みます。現に四五日前の晩にも、愛宕下の伊勢屋といふ質屋へ二人連

れの浪人が押込みまして、ぬき身で主人や番頭共をおどしまして、金五十兩をうばひ取つ

て立去つたと云ふことでございます。

伊兵衛。

さういふ物騒な世のなかにありますと、わたくし共の商賣などは猶々劍呑でございます

よ。

源五郎。

む。氣ちがひに刃物といふが、強盗に刃物もよくなからうな。

石見。

些とぐらゐる商賣の忙がしいよりも、やはり世間の穩かな方がよろしうございます。

源五郎。

それもさうだな。

湯屋の二階



小僧。(云ひかけて源五郎は躊躇してゐる。奥より小僧は茶を持って出づ。)  
どうぞ召上つてください。

源五郎。構ふな、かまふな。

(源五郎は茶をのむ。小僧は奥に入る。)

伊兵衛。早速ながら何か御用でございませうか。

源五郎。その用は……。仕事のことで参つたのではない。實は少し頼みたいことがあつて来たのだ  
が……。

伊兵衛。(きよつとしたやうに。)へえ。

源五郎。いや、いや、わしはその軍用金などを押借りに来たのではない。實はこゝの店で買つて貰  
ひたいものがあるのだ。

伊兵衛。では、お差料のお古い品でも……。お拂ひになるのでございませうか。

源五郎。いや、大小のたぐひではない。わしが引取つて貰ひたいといふのは……。まあ見てくれ、  
これだ。

(源五郎は風呂敷を解きて、油紙につゝみたる泥鯨の皮三枚を取出し、伊兵衛のまへに置く。)

伊兵衛。これは泥鯨でございませう。(手に取りてみる。)

源五郎。わしの親父がお役で長崎の方に詰めてゐたことがあるので、そのときに和蘭人から買った  
といふのだ。仕上げもせずに其のまゝに持ち傳へてゐたのだが、少し都合があるので手放  
したいと思ふから、相當の値段で引取つてくれまいか。

伊兵衛。さあ。(首をかしげながら主人の顔をみる。)

石見。(氣の毒さうに。)お武家様。折角でございませうが、これはお断り申上げたう存じます。

源五郎。不承知か。(困つたやうな顔をして。)なぜ断るのかな。

石見。わたくし共は刀屋渡世で、鯨の皮に用はございませう。これは鞆師か柄巻師の方へお持ち  
なされるが宜しいかと存じますが……。

源五郎。それはわしも承知してゐるが、鞆師や柄巻師は唯の職人で、泥鯨を買ひ込むほどの元手は  
ない。細工に用ゐる鯨の皮は矢はり刀屋から廻してやる筈だが、江戸ではさうではない  
かな。

石見。(これも少し困つて。)御もつともでございませう。わたくし共でも必ずお取引を致さないと申  
すわけでもございませうが、多年この商賣をいたして居りまして、泥鯨の見分けはなか



なかもづかしいものでございまして、傷があるか血量があるかはすつかり仕上を致して  
みなければ判りませんので、萬一瑕物でございしますと甚い損耗を致さなければなりません。  
それも商賈人同士の取引であれば格別、失禮ながらお馴染も無い旦那様方がお持ちになり  
ました品を迂濶に頂戴いたすわけには参りかねますから、何うぞほか店へお持ち下さるや  
うに願ひます。

源五郎。

實はほかでも一二軒聞き合せたのだが、會津屋ならば屹と引取るだらうと申すので、こゝ  
を目ざして参つたのであるから、どうか我慢して引取つて貰ひたい。當方から押して頼む  
のであるから、値段の押し引きは致さぬ。そちらで相當 思ふ値段で引取つてくれればよい  
のだ。

石見。

左様でございしますか。  
(石見は伊兵衛の額をみる。伊兵衛は買ふなと眼で知らせる。)

源五郎。

こんなことを押して頼むのは心苦しいが、わしも差迫つて少しく金の要ることがあるの  
で、無理を肯いて貰はなければならぬ。これ、幾らでもよいから引取つてくれ。

伊兵衛。

唯今も申上げます通り、おなじみも無いあなた様方から斯ういふ品のお取引をいたしましたし

た例は一度もございませぬので……。

源五郎。

斷つて置くが、これはわしの家に傳はつてゐるもので、決して出所の怪しい品ではないぞ。  
さうでもございませうが、自然又なにかの間違ひでもございしますと、手前共でもまことに  
迷惑いたしますから……。恐れ入りますが、これはお持歸りをねがひます。

伊兵衛。

(下のかたより三河町の半七出で、店のまへを通り過ぎようとして源五郎に眼をつけ、立ちどまつ  
て眺めてゐる。)

源五郎。

(すこし考へて。)では、わしがこれほどに譯を申しても、やはり不正の品とでも疑つてゐる  
のか。

伊兵衛。

いえ、疑ふと申すのではございませぬが……。

源五郎。

自然なにかの間違ひが出来ると手前共が迷惑すると、おまへは唯今申したではないか。そ  
れも畢竟この皮を不正の品とあやぶんでゐるからのことだ。(きつとなつて。)大小をさして  
ゐる者は、みんな押借りや強盜をはたらく浪士の仲間だと思つてゐるのか。

石見。

いえ、とんでもないことを……。その御立腹では恐れ入ります。(伊兵衛に。)お武家様に對  
して失禮を申上げてはならない。よくお詫びを下さい。



伊兵衛。

へい、へい。恐れ入りましてでございます。

源五郎。

詫びるならば詫びるでよい。わしも深く咎め立ては致さぬが、そこでこの相談はどうして  
くれる。武士が頼むのだ。素直に引取つてくれ。

(石見と伊兵衛は顔をみあはせて困つてゐる。半七は進み寄つて聲をかける。)

半七。

番頭さん。お暑うございます。

伊兵衛。

お、三河町の親分でございますか。

石見。

さあ、親分。どうぞおかけ下さい。

(二人は好い人が来てくれたと喜ぶ。)

伊兵衛。

(奥にむかひて。)これ、誰か知らないか。早く親分さんにお茶を差上げろよ。

(半七は腰をかけて、源五郎をちつと視る。源五郎は邪魔な奴が来たと言ふこゝろにて黙つてゐる。)

小僧は奥から茶を持つて出で、半七のまへに置いてゆく。)

源五郎。

どうだな。今の相談は……。

石見。

幾度申上げて同じことで、どうか御勘辨をねがひます。

源五郎。

どうしても不承知か。

伊兵衛。

(半七の方をかへりながら。)何分おなじみのない方の品を頂戴いたしますと、あとが面倒で  
ございますから……。

源五郎。

(むつとしたるが、押鎮めて。)決して怪しい品ではないと、あれほど申聞かせても判らぬか。  
よい、よい。それではもう頼まぬ。

(源五郎は泥鯱の皮を元の通りにつゝんで起つ。)

伊兵衛。

(冷かに。)どうもお氣の毒さまでございました。  
(源五郎は無言で風呂敷包みをかへ、足早に上のかたへ立去る。)

半七。

ありやあ泥鯱ちやありませんかえ。  
さうでございます。是非買つてくれと云ふのでございますが、見ず識らずのお武家からあ  
んなものを迂濶に買ふわけにはまゐりません。商賣上の損得は兎も角も、萬一なにかの引

石見。

合ひでも食ひましては甚だ迷惑いたしますから、堅くお断り申してしまひました。

伊兵衛。

まして此頃は油断がありません。よいところへ親分さんが来て下さつたので、おとなしく  
立去つてしまひましたが、左もないとだん／＼に強面に嚇しかけて、どんな難題を云ひ出

したかも知れませんでした。ねえ、旦那。あれほど漆濃く口説いてゐた癖に、親分さんの

湯屋の二階



顔が見えると、早々に店をしまつて立去つたのを見ると、あいつも矢つぱり迂散らしうございませぬ。

石見。

さうさな。(かんがへる。)やつぱり伊勢屋へ押込んだお仲間かな。

伊兵衛。

あんな物をどこから持ち出して来たか判りやあしません。なにしろ斷つて宜しうございませぬ。

半七。

(衝と起ちあがる。)いや、どうもお邪魔をしました。

(半七はすたくと上のかたへ立去る。石見と伊兵衛はすこし呆氣に取られたやうに後を見送る。)

二

愛宕下、藪の湯の入口。中央は番臺をうしろから見たる心にて高い出格子、これに糠袋などが掛けである。上のかたは男湯、下のかたは女湯にて、入口に暖簾をさげ、暖簾のうしろは紙を貼り込みたる潜り戸の格子。格子の左右は矢張り出格子にて、下は板羽目。その羽目の前には留桶や小桶を積みかさされて干してある。男湯のまへには長床几が一間置いてある。

(湯屋の女房おとよは團扇を持ち、うしろ向きになつて番臺の上に坐つてゐる。男湯から浴衣をかきた男が手拭を持つて出づ。)

おとよ。

ありがたうございませぬ。

(男は上のかたへ去る。下のかたより町家の女房と娘が手拭や糠袋などを持ち、小さい男の兒が水鉄砲を持ち出て、女湯に這入る。)

おとよ。

いらつしやい。(流しの柵を打つ。)

(女湯の格子をあけて、二階番のお吉、第一幕の箱を入れたる風呂敷包みをかへて出で、そつと下のかたへ行かうとすれば、おとよは番臺の格子から聲をかける。)

おとよ。

さいちやん。どこへ行くの。(包みを袖で隠してゐる。)

お吉。

(すこし慌てゝ。)あの、ちよいと其處まで……。(包みを袖で隠してゐる。)

おとよ。

白粉でも買ひに行くのかえ。

お吉。

はあ。すぐに歸つて來ます。

おとよ。

いつまでも二階をあけて置いちやあいけないよ。

お吉。

はい、はい。

湯屋の二階



源五郎。

(お吉は早々に行きかゝれば、下のかたより梶井源五郎、これも以前の風呂敷包みをかゝへて出づ。)

源五郎。

高島が來てゐるだらうな。

お吉。

(口籠りながら) いゝえ。  
來てゐないか。はてな。(考へる。)

源五郎。

けふはまだ一度もお見えになりません。

お吉。

おれより先に來てゐる筈だが……まあ、いゝ。いづれあとから來るだらう。(云ひかけてお吉の袖の下に眼をつける。)

おまへも何か抱へてゐるやうだな。  
(ぎよつとしたやうに) いえ、何。これは洗濯物をたのんで來るのでございます。ぢやあ、御免ください。

おとよ。

(お吉は逃げるやうに行きかけて下のかたを見て、又あわて、引返して上のかたへ立去る。源五郎は不審さうに見送りながら男湯に這入る。)

(下のかたより半七出て、男湯の外から番臺に聲をかける。)

半七。

おい、おい。おかみさん。

おとよ。

(格子の内から見かへる。)

半七。

熊はゐるかえ。

おとよ。

はい。内に居ります。

半七。

それぢやあ表へちよいと呼んで呉んねえ。

おとよ。

はい、はい。

半七。

晝寢でもしてゐるんぢやあねえか。

おとよ。

(笑ふ。)

いゝえ、さうでもございませぬ。唯今すぐに呼んでまゐります。

(おとよは番臺を降りてゆく。半七は床几に腰をかけてゐる。上のかたより定齋の藥賣が荷をかつぎて出て、下のかたへ行き過ぎる。男湯から三助が出て來て、干してある桶を片附ける。)

三助。

(半七に) いらつしやい。

半七。

やあ、忙がしいかえ。

三助。

盆前は閑でございませぬよ。それに暑いあひだは行水で濟ませますからね。

湯屋の二階



半七。 さう云つても十六日の貰ひ湯はもう直だ。番頭さん。お楽しみだね。

三助。 このごろは世が悪くなつたので、お盆もお正月も以前のやうぢやありませんよ。

半七。 それでも品川へ運ぶ軍用金ぐらゐは出来るのさ。

三助。 へ、御冗談を……。

(女湯からおとよは煙草盆と團扇を持ち出て出す。)

おとよ。 すぐに参ります。(團扇で半七を煽きながら、三助に。)おまへ早く片付けておしまひ、お天氣

がをかしくなつたよ。

三助。 はい、はい。(桶を運んでゆく。)

おとよ。 (半七に。)奥へお通り下さればようござんすのにねえ。

半七。 いや、こゝの方がいゝよ。

(男湯から亭主熊藏は盥團扇を持ち出て出す。)

熊藏。 親分。外でもいゝんですかえ。

半七。 暑いときは表の方がいゝ。それにお前のところは悪い焚物を使ふから、無暗にいぶされる

ので遣切れねえ。

熊藏。

半七。 こりやあ御挨拶だ。(笑ふ。)ちつとは燻してもいゝぢやあねえか。

べらほうめ。藪つ蚊ぢやあねえ。まつたくこゝの方が日かけで好い風が来る。(空を見て。)

おとよ。 なんだか忌な雲が出て来たな。

半七。 ほんたうに忌な雲が出て来ました。夕立でもざつと来るんぢやありませんかねえ。

おとよ。 なんと云へねえ。そこで早速だが、例の侍は今しがた遣つて来たらう。

半七。 はあ、来ましたよ。けふは一人で……。

おれはそのあとを附けて来たんだ。侍は包みをかゝへ込んで来たらう。

おとよ。 細長い風呂敷包みをかゝへて来ましたよ。

半七。 お吉はゐるかえ。

おとよ。 なにか買物に行くと言つて、たつた今出て行きました。

半七。 もう一人の侍は来ないんだね。

おとよ。 今朝からまだ見えませんが、あとから来るかも知れません。

半七。 むゝ。おめえはもう好いから番臺へ行つてゐねえ。

おとよ。 はい、はい。



熊藏。

このごろは晝間だつて油断は出来ねえ。板の間を氣をつけろよ。

おとよ。

お前さんよりは、あたしの方が確かだよ。ぢやあ、御めんなさい。

(おとよは半七に挨拶して内に入る。)

半七。

(笑ふ。) まつたくこの家ぢやあ、亭主よりはかみさんの方が確からしいな。

熊藏。

お前さんまでがそんなことを云ふから、鼻め、むやみに増長していけねえ。(床几にかける。)

そこで、親分。あいつ等をどうしますね。

半七。

さうよなあ。(考へてゐる。)

熊藏。

あいつ等は偽者でせうね。

半七。

いや、偽者ぢやあねえ。

熊藏。

ほんたうの侍でせうか。

半七。

(わが足をたたく。) これをみる。昨日あいつ等が湯に這入つてゐるときに、おれも素知らん顔をしてあとから這入つてみたが、どいつも左の足首が大きかつた。

熊藏。

左の足首が大きい……。

半七。

(舌打ちして。) 手前もわからねえ山猿だな。侍は年中左の腰に重い大小をさしてゐるから、

熊藏。

自然に左の足が太くなつて、足首も右より大きくなつてゐる。裸でゐるところを見とゞけたのだから間違ひはねえ。

半七。

ぢやあ、悪御家人どもかね。なに、髪かみの結むすひやうが違ちがつてゐらあ。どこかの藩中はんちゆうに相違さうみねえが、主人持しゆじんもちか浪人らうじんかそこはまた判わからねえ。きのふも歸かへるところを龜かめの野郎やらうに附つけさせたんだが、あいつもどぢだから途中ちゆうちゆうではぐれてしまやあがつた。どいつも盆暗ぼんくらで仕様しやうがねえ。けふはおれが附つけてみるかな。

熊藏。

だが、親分おやぶん。もうそんなに落付おちついちやあるられませんぜ。あの伊勢屋いせやの押込みおしこの一件けんが世間けんにばつとしてしまつて、方々はうくから手てを入れてゐるらしうござんすから、うかくしてゐて、ほかの奴等やつらに引き舉あげられた日にやあ、親分おやぶんばかりぢやあねえ、この湯屋熊ゆやくまの面つらが立ちませんからね。なんとかして早く埒らちを明あけてしまはうぢやありませんか。ねえ、親分おやぶん。

半七。

さうくしい奴やつだな。(左右さいうをみかへる。) 場知ばしらずに大きな聲こゑをするなよ。

熊藏。

どうも親分おやぶんはおれの云いふことを本氣ほんきで聞いてくれねえから情なさけねえ。今度こんどの一件けんばかりは、



半七。

いつもの法螺熊ぢやあねえといふのに……。  
いくら手前が齒ぎしりをした所で、無證據の者をむやみに召捕るわけにも行くめえぢやあねえか。まして相手は侍だ。迂濶に手を出して、飛んだ逆捻ぢを食つた日にやあ好い馬鹿をみるからな。

熊藏。

まだそんな事を云つてゐるのか。(じり／＼するやうに。) おめえさんがあんまり氣が長えので、わつしやあ口惜しくつてならねえ。

半七。

なにが口惜しい。おめえだつて不斷から鈍々して、あんまり氣の短けえ方ぢやああるめえぜ。

熊藏。

だつてさ。今度ばかりは不斷と違つて、大事の魚が眼のまへに泳いでゐるんですぜ。いつまで生洲に圍つて置くことはねえ、早く網をぶつ込んでしまはうぢやありませんか。伊勢屋へ押込みに這入つたのは、確かにこゝの二階へ来る奴等ですよ。

半七。

それにしても、その二人侍が大事さうに持つてゐる箱の物はなんだらうな。龜と幸次郎の話ぢやあ、獸物の骸骨らしいと云ふぢやあねえか。

熊藏。

どうもさうらしいござんすねえ。

半七。

それが變だな。それから一人の侍は今日も日蔭川の刀屋へ泥鮫の皮を賣りに来たよ。

熊藏。

ふむ、泥鮫の皮……。どうも變な物ばかり抱へあるいてゐるやあがるな。それも皆んな何處からか擧げて来たんですよ。ねえ、親分。(すり寄る。) わつしやあ一生のお願ひだ。この一件だけは早く思ひ切りをつけてお呉んなせえよ。大事を取つてゐる日にやあ際限がねえ。

半七。

そのうちに他から手を入れられると、元も子も無くしてしまふぢやあありませんか。まあ、急くなよ。勿論あいつ等は怪しいに相違ねえ。屋敷者にしろ、浪人者にしろ、大小をさした奴が毎日毎日湯屋の二階に来て轉がつてゐる筈がねえ。いづれ何かの仔細があるには決つてゐるが、唯それだけのことで無暗に御用の聲はかけられねえからな。

熊藏。

さう云つてゐる日にやあ切りがねえといふのに……。大抵のことは此方の見込みで遣つてしまはなけりやあ埒が明きませぬ。ねえ、親分。

半七。

待て、待て。おれに些と考へさせてくれ。  
(半七はかんがへてゐる。熊藏は起ち上つて焦れつたさうに眺めてゐる。下のかたより子分龜吉が足早に出づ。)

龜吉。

お、親分。もう來てゐなすつたか。(湯屋の二階を頭で指して。) いや／＼奴等はほん者で湯屋の二階



すぜ。

半七。 なにか種が擧つたか。

龜吉。 わつしは唯つた今聞いて来たんだが、ゆうべ田町の兩換屋へ二人組の浪士が押込んで、紋切形の黒船焼討で七十兩ばかりふん奪つて行つたさうですよ。

熊藏。 その田町か。

龜吉。 札の辻の田町よ。

熊藏。 畜生め。又遣りやあがつたな。

半七。 それもやつぱり二人連れか。

龜吉。 二人ださうです。

熊藏。 それ、それだから云はねえことぢやあねえ。おい、親分。もうしびれを切りしてゐる場合ぢやありませんか。

龜吉。 もう斯うなりやあ確かにあいつ等ですよ。

半七。 む。 (まだ考へてゐる。) それにしても相棒の奴はどうしたかな。

龜吉。 けふは二階に来てゐるねえのかえ。

熊藏。 ひとり来てゐるが、一人はまだ来ねえのが不思議だよ。

龜吉。 まさかに飛んでしまつたわけでもあるめえ。ひとりを引擧げて、一人を逃がしてしまふと詰まらねえな。親分、どうしませう。

(半七は黙つて考へてゐる。熊藏はそつと指さして、あれだから困ると眼で知らせれば、龜吉も顔をしかめる。下のかたより女ひとり出で、女湯に這入る。)

(内にて。) いらつしやい。(云ひかけて、女湯から表に聲をかける。) ちよいとお前さん。

おとよ。 熊藏。 なんだ。

おとよ。 (小聲で。) 二階のが降りて来るらしいよ。

熊藏。 歸るのか。

おとよ。 さうらしいよ。

龜吉。 二階の奴は歸るのかえ。

おとよ。 (表へ出る。) だつて、大小を持つて降りて来るやうですよ。

(男湯から梶井源五郎出づ。)

おとよ。 (なにげなく。) お歸りなさいまし。

湯屋の二階



源五郎。

二階番の女はまだ歸らないか。

おとよ。

まだ歸りません。ほんたうに何をしてゐるんでございますかねえ。

熊藏。

(源五郎は少し考へながら上のかたへ去る。人々は見送る。)

口惜しい、口惜しい。どう考へてもおらあ口惜しくつてならねえ。おい、龜。おめえはど  
う思ふ。

龜吉。

どう思ふと云つて……。親分だつてもう打つちやつても置くめえぢやあねえか。

半七。

(おとよに。)お吉はまだ歸らねえんだね。

おとよ。

なんだか狐鼠狐鼠出て行つたぎりなんですよ。

半七。

なんにも持つて出やあしなかつたかえ。

おとよ。

さあ、番臺にゐたもんですから、そこまではよく氣が付きませんでしたかねえ。

半七。

(床几を起つ。)おい、熊。二階へ行つて戸棚をあらためてくれ。例の箱があるかねえか、よ  
く見て來るんだぜ。

熊藏。

ようがす。

龜吉。

おれも一緒に行かう。

(熊藏と龜吉は急いで内に入る。半七は床几に腰をおろして又かんがへてゐる。空はだん／＼暗く  
なる。)

おとよ。

だん／＼に陰つて來て、蒸暑くなりましたね。

半七。

(おとよはそこにある團扇を取つて半七を煽ぐ。)

おとよ。

あゝ、うるせえ。ばさ／＼遣つちやあ氣が散つていけねえ。

おとよ。

はい、はい。

おとよ。

(上のかたより第一幕の町人利平出づ。)

おとよ。

今日は……。

利平。

今日は……。なんだか夕立でも來さうですね。

おとよ。

けふはすぐにお歸んなさいよ。夕立よりも阿母さんのかみなり様に鳴り込まれると太變で  
すからね。

利平。

まつたくだ。桑原、桑原。

(利平は笑ひながら男湯に這入る。遠く雷の音。おとよは空を見る。やがて内より熊藏と龜吉、あわ  
たゞしく出づ。)



龜吉。いけねえ、いけねえ。あの玉手箱を持ち出してしまやあがつた。  
半七。持ち出したか。

熊藏。いつの間にか、へ出しやあがつたかな。

おとよ。あたしも番臺で氣をつけてゐるが、あの人達はそんな物をかゝへ出した様子はなかつたがねえ。

熊藏。それ見ろ。手前なんぞは些とも確かぢやあねえや。ふだんから亭主を野呂ま扱ひにしやあがつて、手前こそ野呂まの本家本元だ。

おとよ。だつて、お前。まつたく氣が注かなかつたんだもの。

熊藏。それが盆暗の明盲と云ふんだ。ざまあ見やがれ。

おとよ。おまへだつて昨日は番臺にゐるぢやあないか。あたしが盲なら、おまへも座頭の坊だよ。  
熊藏。なにが座頭だ。

半七。おい、おい。際どいところで夫婦喧嘩なんぞ始めちやあいけねえ。ひとりの侍は姿をみせず……箱はなくなる……お吉は歸らず……。もう仕様がねえ、いよく珠數の緒を切るかな。おい、龜。おめえがああ侍に途中ではぐれたのは何の邊だつてな。

龜吉。(きまり悪さうに) そのこの切通しの先あたりでしたよ。

半七。ぢやあ、思ひ切つて出かけようか。まだ遠くは行くめえ。

熊藏。出かけますかえ。

半七。お吉の家は近所だらう。おめえはこれからお吉の家へ行つて、歸つてゐるか何うだか見とどけてくれ。

熊藏。ぢやあ、すぐに行つて來ます。

半七。ついでに幸次郎の家へ寄つて……。 (何か囁く。)

(熊藏はうなづいて下のかたへ駈けてゆく。)

おとよ。(小聲で) いよく、お捕物でございますか。

半七。む。 (龜吉に) 相手は侍だ。ふり廻すかも知れねえから用心しろ。

龜吉。ようがす。

(稻妻ひらめく。)

龜吉。や、光りやあがつた。

半七。なんでも構はねえ。來い、來い。



(半七は先に立ち、龜吉もつゞいて上の方へ駆けてゆく。おとよはあとを見送る。稻妻又ひらめきて、ざつといふ雨の音。おとよはあわて、床几を片附ける。雨の音、雷の音。この夕立に逢ひたる往來の男、女、小僧など出て、左右にすれ違ひて走り去る。中には湯屋の軒下へ駆込むものもある。)

幕

### 第三幕

芝の切通し。上のかたには荒むしろをおろしたる觀世物小屋。つゞいて茶店、これも店を仕舞つた體にて葎簀を寄せかけてある。うしろには山内の森が見える。

(第二幕とおなじ日のゆふぐれ。遠く雷の音。薄く雨の音。下のかたより梶井源五郎は彼の風呂敷包みをかゝへて出づ。)

源五郎。い、鹽梅に雨も小降りになつたやうだ。

(源五郎は上のかたへ行きかゝると、茶店の葎簀のなかよりお吉は箱の包みをかゝへて出づ。)

お吉。もし、あなた……。梶井さん。

源五郎。お吉か。どうしてこんなところにいるのだ。

お吉。どうしてと云つて……。あなた、高島さんの居所を知りませんか。

源五郎。いや、實はおれも探してゐるのだが、けふは一度もおまへの二階へ行かなかつたか。

お吉。一度も顔を見せやあしません。(涙ぐむ)どうしたんでせうねえ。

源五郎。どうしたのかな。(考へる)お前になんにも話はなかつたのか。

お吉。あたしはやつぱり欺されたんですかねえ。(泣く。)

源五郎。では、高島と何か約束でもしてあつたのか。

お吉。あの人のいふには、どうしても江戸にはゐられない譯があるから、どこへか身を隠さなければならぬ……。

源五郎。どこへか身を隠さなければならぬ……。高島がそんなことを云つたか。

お吉。云ひました。それであたしを一緒に連れて行つてくれる約束で……。

源五郎。(少しおどろいて)おまへと断落をする約束をしたのか。む、やつぱりさうか。それでど湯屋の二階



うした。

お吉。

あたしはその積りで、ゆうべもこゝへ来て待つてゐたんですけど、たうとう姿を見せな  
いんです。けふは来るかと思つて、さつきから待つてゐるんですけど、あなたもその居  
所を知らないやうぢやあ何うでせうかねえ。あたしを置去りにして、もう何處へか行つて  
しまつたんぢやあないでせうか。

源五郎。

まさかとは思ふが……。どうも氣の小さい男だからな。(考へる。)殊にゆうべから屋敷へ歸  
らないのを見ると、なんとも云へないな。

お吉。

ゆうべからお屋敷へ歸らないんですか。

源五郎。

む。きのふの夕方、ほかに寄るところがあるからと云つて途中で別れたのだが……。そ  
れぎりて屋敷へも歸らず、お前のところへも寄付かず、どこをうろ付いてゐるのかな。な  
にしる屋敷へ歸つたら判るだらう。まあ、あしたまで待つがよい。(空を見る。)お、雨も  
すつかり止んだらしい。飛んだ夕立に出逢つて、途中でしばらく雨やどりをしてるたの  
で、時刻がいつもより後れてしまつた。

(源五郎は上のかたへ行きかゝる。お吉は何か考へてゐたが、急に追ひかけて杖をつかむ。)

お吉。

まあ、待つて下さいよ。あなた、後生ですから一緒に連れて行つて下さいよ。

源五郎。

どこへ連れて行くのだ。

お吉。

高島さんのゐるところへ……。

源五郎。

それが判らないから、おれも心配してゐるのではないか。

お吉。

いゝえ、あなたは知つてゐるに違ひありません。高島さんに頼まれて、あたしに隠してゐ  
るんでせう。

源五郎。

お前はどうも疑ひぶかい女だな。まつたく知らないから知らないといふのだ。

お吉。

ふだんからあんなに仲好しのあなたが、あの人の行く先を知らないといふ筈はありませ  
ん。知つてゐながら隠してゐるんでせう。いゝえ、さうです。屹とさうです。(泣く。)

源五郎。

(面倒になつて。)まあ、なんでもいゝ。今もいふ通り、おれは途中で雨やどりをしてるたの  
で、門限が後れさうだ。早く歸らなければならぬ。

(源五郎は振切つて行きかゝるを、お吉は又取付く。)

お吉。

そんな意地の悪いことを云はないで、一緒に連れて行つて下さいよ。

源五郎。

連れて行かれないと云ふのに……。わからない奴だな。

湯屋の二階



お吉。

(この押着のあひだに、上のかたの観世物小屋のむしろを明けて、半七がそつと窺つて又隠れる。)

あなたが連れて行つてくれなければ、あたしはどこまでも附いて行きますよ。

え、屋敷まで附いて來られて堪るものか。あしたは高島の安否をしらせて遣る。おれが

お吉。

屹と知らせでやるから、今日はまあおとなしく歸れよ。

源五郎。

いゝえ、歸りません、歸りません。

お吉。

どうしても歸らないのか。

源五郎。

あの人に逢はないうちには歸りません。

お吉。

その居所が知れないと云ふのに……。

源五郎。

いゝえ、あなたが隠してゐるんです。

源五郎。

(持餘して) まだそんなことを云つてゐるのか。では、勝手にしろ。

源五郎。

(源五郎は行きかゝれば、お吉も附いてくる。)

お吉。

これ、附いて來るなよ。

源五郎。

勝手にしろと云つたぢやありませんか。え、漆濃い奴だ。附いて來ると承知しないぞ。

半七。

(源五郎はお吉を突き倒して、足早に行きかゝる時、観世物小屋のむしろをあけて、半七出づ。)

源九郎。

(みかへる。) 拙者に何か用かな。

半七。

(町寧に) 先刻は失禮をいたしました。實は少々おたづね申したいことがございますが……

源五郎。

わたくしはお上の御用をうけたまはる神田三河町の半七と申すものでございます。

半七。

(迷惑さうに) そこで、拙者にどういふことを尋ねたいと云ふのかな。

源五郎。

先つあなたの御苗字と御屋敷のお名前をうかゞひたいのでございますが……。

半七。

(いよく迷惑さうに) 往來中でそんなことを詮議してどうするのだ。

源五郎。

少しこちらに入用のごとがございますので……。どうか正直に仰しやつてください。

源五郎。

(曖昧に) 拙者は西國の藩中だ。

半七。

西國とばかりでは判り兼ねます。その御屋敷のお名前を、はつきりと仰しやつて頂きたうぞい

源五郎。

ざいます。

源五郎。

いや、仔細も無しに屋敷の名を明かすわけには參らぬ。どんなことで屋敷の迷惑にならぬ

源五郎。

とも限らぬからな。



半七。

では、あなたのお名前は……。

源五郎。

拙者の名は……。中村と申す。

半七。

中村……。 (お吉をみかへる。) 丁度そこに證人がゐる。おい、お吉。この人は中村さんといふのかえ。

お吉。

え。

半七。

しつかりと返事をしろ。この人は梶井さんと云ふんぢやあねえか。

お吉。

(よんどころなく。) はい。

半七。

(源五郎に。) 中村さん、梶井さん、あなたは名前が二つあるんですかえ。

源五郎。

え。

(このあひだに、觀世物小屋のむしろをあけて龜吉、茶店の葎簀のかけから幸次郎、いづれも忍んで窺つてある。)

半七。

(あざ笑ふ。) 肩書付きのごろつきならば知らねえこと、大小をさしたお侍に二つ名のあるのもめづらしい。屋敷の名を聞いても正直に打明けず、自分の名をきけば嘘をいふ。(屹となつて。) おまへさんは侍にしても主人持ちやああるめえ。浪人者だな。どこの店借りをし

源五郎。

てるのか、はつきり云へ。この上に隠し立てをすると、もう容赦はしねえよ。

半七。

なに、容赦はしない……。 (これも少し屹となる。) 拙者を手籠めにでもするといふのか。だから、こつちが遠慮してゐるうちに、素直に云へといふのだ。え、おい、どうしても云つてくれねえのか。

源五郎。

(又思ひ直して、無理に笑顔を粧る。) いや、これは拙者が悪かつた。少しく仔細があつて本名を憚り、中村なぞと偽名を申したが、あらために正直に名乗り申す。拙者の本名は梶井源五郎。

五郎。

さうして、もう一人の連れはどうしましたえ。

その連れは……。 實は昨夜からゆくへが知れないので、拙者も探してゐるのだ。

半七。

あの男の名は……。

源五郎。

高島彌之助。

半七。

おまへさんが梶井源五郎、連れの男が高島彌之助……。 そこで、屋敷の名は……。

源五郎。

屋敷の名はどうも明かされぬ。それだけは勘辨して貰ひたい。

半七。

いや、勘辨できねえ。おまへさん達にうしろ暗いことがなければ、正直に屋敷の名を云つ



てもいゝぢやありませんか。一體おまへさん達は何ういふ身分で、どういふ譯があつて、湯屋の二階に毎日毎日轉がつてゐなさるのだ。

源五郎。

それは少し譯があるのだ。

半七。

そのわけが聞きてえ。かりにも侍と名の附く者が湯屋の二階に日を暮してゐて好いのかえ。

源五郎。

その不審も一應もつともだが、唯今も申す通り、それには少し譯があるのだ。

半七。

だから、その譯を聞かしてくれと云ふのに……ひどく世話を焼かせるぜ。

(源五郎はだまつてゐる。)

半七。

(すり寄る。)おめえさん達は晝間は湯屋の二階にごろ／＼してゐて、日が暮れると何處へ行くんだ。

源五郎。

日が暮れれば屋敷へ歸る。

半七。

その屋敷はどこだよ。

源五郎。

さあ。(口籠る。)それは勘辨してくれと云つてゐるではないか。

半七。

その屋敷はお定まりの赤井御門守様ぢやあるめえ。大かた質屋か兩換屋か、いづれも金

に縁のありさうなお屋敷だらうね。

源五郎。

なに……。

半七。

だんびらを振りまはして、弱い町人をおどかして、大分好い仕事をするだらうね。

源五郎。

では、われ／＼を盗賊だといふのか。

(源五郎も少し驚いたらしいが、急に笑ひ出す。)

源五郎。

それでやかましく詮議するのさ。なるほど高島が氣を揉んでゐた筈だ。これはどうも困つ

たな。

半七。

困るのは心柄だ。なにも彼も正直に云つてしまはねえかよ。

源五郎。

それが云へないので困るのだ。云はなければお前達はどうしても拙者を手籠めにするとい

ふのか。

半七。

知れたことだ。

(半七は不意に飛びかゝつて、源五郎の長い刀を引つたくる。)

源五郎。

え、何をいたす。

(これと同時に、小屋と茶店から龜吉と幸次郎がばら／＼と飛び出して源五郎に組みつく。お吉はお

湯屋の二階



どろいて茶店へ逃げ込み、葎簀のかけから窺つてゐる。源五郎は二人を相手に挑み合ふうちに、龜吉は隙をみて源五郎の小刀をも奪ひ取るを、源五郎は取返して龜吉を投げ退ける。幸次郎は源五郎の頭髪をつかんで引倒さうとする。下のかたより熊藏が尻からげにて走り出づ。

おゝ、熊か。助けてやれ。

(熊藏も源五郎に組んでかゝる。三人に取付かれて、源五郎も遂に組み敷かれ、龜吉は繩をかける。このとき下のかたより高島庄右衛門が足早に出づ。)

庄右衛門。これ、これ、それにゐるのは梶井源五郎ではないか。

源五郎。おゝ、庄右衛門殿か。

庄右衛門。して、この體たらくは。

源五郎。面目次第もござらぬ。

庄右衛門。(半七等を見ませす。) お手前達は町方の衆かとも見ゆるが、なんでこの梶井に繩をかけられた。

半七。

(進み出づ。) 御用があるから召捕りしましたが、何うしましたえ。  
(龜吉は源五郎の繩を取り、熊藏と幸次郎は油断せず庄右衛門を取りまく。)

庄右衛門。

源五郎。

なに、御用がある……。 (源五郎に。) お手前はいかなる罪を犯したのだ。別に罪を犯した覚えはござらぬが、物の間違ひで盜賊のうたがひを受け、かやうな始末と相成つてござる。

庄右衛門。

源五郎。

庄右衛門。

源五郎。

して、弟の彌之助は如何いたしました。そのゆくへが知れぬので、拙者も今朝から心當りを探して居りました。昨夜より屋敷へ戻らず。(ため息をついて。) さてはいよく、逐電したな。どうもさうらしく思はれます。日限が次第に迫つて來るのをひどく苦にしてゐらるゝので、拙者も色々になだめて居りましたが、たうとう堪りかねて姿を晦ましたのでござりませう。

庄右衛門。

源五郎。

庄右衛門。

大小を帶する者が湯屋の二階に毎日遊び暮してゐるは不審だと申すのでござります。弟も弟なら、お手前もお手前だ。身のあやまちを償ふために、大事の役目をうけたまはりながら、湯屋の二階へ行つて毎日遊んでゐるとは、甚だ怪しからぬことではないか。左様な噂を耳にして、お手前もひそかに詮議最中のところ、弟はゆくへを晦まし、お手前はかやうな始末と相成る。いづれも言語道断でござるぞ。



源五郎。

はあ。

庄右衛。

今更叱つたとて返らぬこと、先づお手前の縄目を解いて貰はねばなるまい。

(このあひだに半七は庄右衛門の様子をみて、あとへ退つてゐると子分等に眼で知らせ、自ら進んで源五郎の縄を解く。)

半七。

仰しやるまでもなく、この通りでございます。

源五郎。

では、拙者のうたがひは晴れたか。

半七。

疑ひはまだほんたうに晴れねえが、今のお話の御様子では、兎も角もあなたを縛るには及ばねえやうです。だが、このまゝでハイ左様ならと云ふわけには行きません。もし、お二人さん。わたくしばかりでなく、この子分どもの聴いてゐるところで、みんなが得心の行くやうに、譯を話して下さいませんか。

庄右衛。

む。(源五郎と顔を見あはせる。)もう斯うなつたら致方があるまい。お手前は屋敷の名を明かされたか。

源五郎。

いや、それを打明けぬといふので、いよく疑ひをかけられたのでござるが、何分にも屋敷の名は……。

庄右衛。

(うなづく。)いかにもこの場合に屋敷の名を出すのは困る。(半七に。)右の次第で、屋敷の名はどうも申兼ねるが、手前の弟彌之助とこの源五郎は……。 (聲をひくめる。) 實はかたき討の助太刀に出てるのだ。

半七。

へえ、かたき討……。ほんたうでございますか。

源五郎。

いや、嘘でない。拙者共はまつたくその助太刀に出て、かたきのありかを探してゐるのだ。

庄右衛。

とばかりでは判るまいが、この四月の中ごろに、源五郎と彌之助、ほかに神崎郷助、茂原市郎右衛門といふ若侍の四人連れで、品川のある遊女屋へ夜遊びにまるつた。

(熊藏、龜吉、幸次郎をばじめ、お吉も茶店から出て来て、その話に耳をかたむける。)

庄右衛。

いや、その時のことは本人の方がよく知つてゐる筈だ。源五郎。お手前から懺悔話をしろ。

源五郎。

近ごろ面目ない儀だが、その席上で茂原と神崎とが酒の上から口論をはじめたのを、彌之助と拙者が仲裁して、その場は一旦無事に納まつたが、夜ふけて四人が歸る途中、人通りの少い高輪の海邊に差しかゝると、神崎は先刻のことを矢はり胸に持つてゐたとみえて、不意に刀をぬいたかと思ふと……、茂原はそこにばつたり倒れる、神崎は一目散に逃げてゆく。取残された我々はたゞ呆氣に取られてゐるばかりであつたが、今更どうすることも

湯屋の二階



半七。

庄右衛。

出来ぬので、茂原の死骸を駕籠に乗せて窃と屋敷まで運んで歸つた。そこで、下手人の神崎といふ人はどうしましたえ。

その場からゆくへを晦まして、今にそのありかは判らぬ。殺された茂原には一人の弟があつて、すぐにかたき討の願ひを差出したが、表向きのお暇は下されず、兄の遺骨を國許へ送る途中、佛寺に参詣し、または親戚の許に立寄るは苦からずといふ御内意で、弟は早々に出發した。就てはこの源五郎と弟の彌之助、遊里に立入つて身持よろしからずとのお叱りを受けたのみか、當夜双傷のみぎりに相手の神崎を取逃したるは不用意の致し方とあつて、兩人ともに厳しいお咎めを蒙つた。しかもその過意として仇討の助太刀を申付けられたが、他國へ踏み出すことは相成らぬ。江戸四里四方を毎日尋ねあるいて、百日のあひだに仇のありかを探し出せと申渡された。

半七。

源五郎。

併しその仇の侍は江戸にうかくしてゐるやあしますまい。いづれ遠いところへ逃けてしまつたに決まつてゐます。それを探し出せといふのは些と無理ぢやありませんかね。無理であらうが無からうが、屋敷の指圖とあれば是非もない。この嚴命をうけたる彌之助と拙者は、毎日あけ六つから屋敷を出て、ゆふ六つまでは江戸中を探しあるいてゐるうち

に……。いや、かうなれば有體に白状する。最初の半月ほどは我々も正直に根よく江戸中をあるき廻つてゐるが、この難儀な役目にはだんく〜と疲れて來たので、仕舞には二人が相談して、毎朝いつもの時刻に屋敷の門を出ながら、そこらの水茶屋や講釋場や湯屋の二階に這入り込んで、一日をそこに遊び暮すといふ横着なことを考へ出すやうになつたのだ。これが正直の懺悔だ。笑つてくれるな。

庄右衛。

その横着が屋敷にきこえては、いよく當人たちの不首尾をかさねる道理と、拙者も蔭ながら心配して、その遊び場所を突きとめた上で篤と意見をいたさうと存じて居るうちに、百日の日限もだんく〜に迫つて來るので、氣の狭い弟めはいかなるお咎めを受けやうかと、苦勞の末に姿をかくしたと相見ゆる。

(この時、お吉は聲を立て、啜り泣く。)

(みかへる。)お、あの女は……。見たことがあるやうだな。

(泣きながら。)やつぱりあたしは……。置去りにされたのでございます。

源五郎。

まあ、黙つてゐる、黙つてゐる。

熊藏。

(お吉を突きのける。)こん畜生、餘計なところへ出しやばつて來て、大事の話の腰を折るな。

湯屋の二階



引込んでゐる。

半七。まあ、そんなに手暴れえことをするな。泣くのも無理はねえことがありさうだ。おい、お吉。おめえが抱へてゐるのは預かり物かえ。

お吉。はい。

半七。こつちへ出しねえ。

(お吉は泣きながら風呂敷包みを持って来る。)

半七。

(風呂敷をあけて。) 子分どもの話を聞いたばかりで、わたくしはまだ見たことはないんですが……。(庄右衛門に。) これはあなたの御舎弟さんの物でございますかえ。(箱をみせる。)

庄右衛。

(のぞいて。) む、それをいつの間にか弟めが……。(考へて。) はて、なんのために持ち出したかな。

源九郎。

彌之助どのも近來よほど手詰まりの様子であつたから、恐く金に換へる積りでござつたらうが、物が物だけに引取手もないので、そのまゝに行かれたものと察せられます。實は拙者も同様の手詰まりで、父の代から傳來のこの泥鯨を……。 (鯨の皮をみせる。) どこへか賣拂はうと存じて抱へあるいてゐましたが、行く先々で断られました。(苦笑ひする。)

半七。

どなたも妙な物ばかり持つてゐるので、餘計に疑ひが懸つたわけです。話の種にこの玉手箱をあけて見ても好うございますかえ。

庄右衛。

家の寶として祕藏の品ではござるが、苦しうござらぬ。御覽なされ。では、拜見いたします。

半七。

(半七は箱をあけると、第一幕の罫腰が出る。)

庄右衛。

ふむう。これは何でございますね。それは先祖が朝鮮から分捕りして參つたもので、虎の罫腰……。

庄右衛。

虎の罫腰でございますか。彼の國では枕にするとか聞いて居ります。

半七。

(子分等に。) おい、もう一度よく見ておけ。これは虎の頭だどよ。めづらしいものぢやあねえか。

熊藏。

ふむう。虎の頭か。  
(熊藏、龜吉、幸次郎は今更のやうに覗いてみる。舞臺は眞暗になる。)



## 二

舞臺は再び明るくなると、うしろは黒幕。

(幕の外に半七出づ。)

半七。

皆さん、どうも申譯がございません。今度は半七がしくじりました。わたくしも商賣にかけては可なりに念を入れる方なのですが、傍の奴等があんまりわあく騒ぐもんですから、わたくしもうつかり釣り込まれて、飛んだ人違ひをしてしまいました。お聞きの通りの始末で梶井源五郎、高島彌之助、あの二人は強盗でも浪人でも何でもなく、自分たちの落度から仇のありかを探して歩かなければならない事になつて、初めの間はまあ正直に探しまはつてゐたんですが、途中からだん／＼に倦きて来て、本氣になつて仇を探すといふ料簡もなくなつてしまつたのです。もと／＼自分たちの仇といふわけでも無し、云ひ付けられて據ろなしに出て來るんですから、まあさうなるのが自然の人情かも知れませんか。そこで、湯屋の二階なんぞに轉がつて、毎日唯ふらく／＼してゐるうちに、百日の日限もた

ん／＼に残り少くなつて來たので、二人も身のゆく末を考へるやうになりました。日限を過ぎては仇のありが知れないといふ曉には、自分たちも無事には濟むまい、重ければ切腹か放逐、軽くとも身持放埒の廉で國許へ追ひ還されるぐらゐのことは覺悟しなければなりません。梶井といふ人は自體が暢氣に出來あがつてゐる上に、自棄も幾らかまじつて、どうともなれと度胸を据ゑてゐたのですが、一方の高島は氣の小さい男ですから、なかなか落ちついてゐられません。殊にお吉といふ女が附いてゐるので、いよく氣が弱くなつて、初めは一緒に駈落をする積りだつたのですが、女を連れては足手まとひだと思つたらしく、道行の約束を反古にして、自分ひとりで隨徳寺を決めてしまつたのです。さういふわけですから、質屋や兩換屋をおどしてあるいた浪人組とはまつたく別者で、ほん者の浪人ふたりはそれから二月ほど経つた後に、よし原で御用になりました。肝腎のかたき討の方はどうなつたか、高島といふ侍はどうしたか、その成行は聞きませんでしたが、梶井といふ人は腹も切られず、國へも追ひ還されなくて、その後時々藪の湯の二階へ遊びに來たさうです。

なにしろ今度は飛んだ不手際をお目にかけて恐れ入りました。この次にはわたくしも腕を



揮つて、半七の手際はどんなもんだと云ふやうな面白ものを御覽に入れたいと存じて居りますから、どうかこれにお懲りなく、重ねて御見物をねがひます。先づ今晚はこれで御免ください。

(半七は會釋して去る。)

幕

蛇を賣る女 (喜劇)



大正十三年六月作。

昭和四年十二月。東京放送局放送。

主なる放送俳優は助高屋高助。澤村田之助。中村芝鶴など。  
但しこの戯曲は普通の舞臺を豫想して起稿したもので、特にラヂオ劇として書き  
おろしたものではありません。

登場人物

帶刀 甲 乙 丙 丁 魚賣の女

平安朝の中ごろ。京の帶刀の陣。(東宮御所警衛の舍人にて、兵仗を帶するものを帶刀といひ、詰所を陣といふ。)門前の體にて、正面は築地の塀、上のかたに潜り門あり。塀の外には柳を多く栽ゑてあり。秋八月の晴れたる朝。  
(帶刀甲は若き男、弓を持ちて柳の下を人待顔に徘徊してゐる。帶刀乙、これもわかき男、門内より出づ。)

乙。これ、これ。(甲は答へず。)これ、これ、なにをほんやりしてゐるのだ。(近寄る。)これ、どうしたのだ。

甲はまだ氣が注がないやうに、うつかりと歩いて來て、乙につき當る。  
乙。これ、しつかりしろと云ふに……。 (甲の肩をたたく。)

蛇を賣る女



乙。

(帶刀丙はやはり若き男、門内よりつかくとして出て来りて、これも乙に突き當たる。)

どうした、どうした。どいつも這奴もゆうべは夜詰めでもないのに、まつ晝間から居睡りをしてゐるのか。あきれたものだ。

丙。

なに、居睡りをしてゐるものか。この通り眞直に立つてあるいて来たのだ。

乙。

からだは立つてあるいてゐても、心は睡つてゐる。たましひは睡つてゐる。(甲を指す。この男とおなじことだ。(笑ふ))

甲。

ばかを云へ。なんでおれが睡つてゐるものか。足もしつかり地を踏んでゐる。膽玉も胸の底におちついてゐるのだ。

(かういふ中にも、甲と丙とは向うをながめてゐる。それをみて、乙はまた笑ふ。)

乙。

は、膽玉は何處におちついてゐるか知らぬが、貴様たちの眼の玉はどこへ向いてゐる。

丙。

あまり天氣がいゝから、表へ出て来たのだ。それが悪いか。

乙。

ちつと悪いな。

甲。

おれは當番だから表を見まはつてゐる。それが悪いか。

乙。

それも悪いな。

甲。丙。

なぜ悪い。わけをいへ。

乙。

(しづかに。)もういつもの魚賣りが来る時刻だからな。

甲。丙。

(むきになつて。)それがどうした。

乙。

(笑ふ。)おれは知らない。貴様たちの胸にきいてみる。あの娘の賣りにくる魚は廉くて旨い

からな。

甲。

まつたくあの女の賣る魚は廉くてうまい。

丙。

もう賣りに来る頃だが……。 (向うをみる。) けふも休みかな。

乙。

それみろ。やれ當番だの、天氣がいゝのと云つたところで、貴様たちが表へうろく出て

くる筋道はちやんとわかつてゐる。(歌ふやうに。) 御垣守る衛士のたく火のよるは燃えて、

ひるは消えつゝ物をこそ思へ。——は、どうだ。どうだ。

甲。

さういふ貴様こそ、あの女のすがたが見えると、眞先にかけて出してくるではないか。

丙。

さうだ、さうだ。このあひだも弓を抛り出したまゝ、夢中で飛び出さうとして、先生どの

に叱られたではないか。

乙。

それは魚が賣切れぬうちに早く買はうと思つたからだ。今もいふ通り、あの娘の賣りにく

蛇を賣る女



丙。 魚は、價が廉くて味がいいので、大勢が我先にと争つて買ひ込むから、また、くひまに賣切れてしまふ。ぐづくしてゐたら一切れもおれたちの口へは這入らないのだ。

それ、それだから、おれもさつきから待つてゐるのだ。まつたくあの女の賣りにくる魚は格別だ。肉が解けさうに柔かで、香ばしい匂ひがして、舌の上へのせると云ふに云はれない旨い味がある。

甲。 あれは一體なんといふ魚だらう。本人は瀬田うなぎだと云つてゐるが、あすこらで捕れる鰻はあんなに膏が強いのかな。

丙。 瀬田鰻は昔から近江の名物だと聞いてゐる。こゝらの池や沼で捕れる泥うなぎとは生れが違ふとみえるぞ。

乙。 まつたくだ。あの鰻を一度食つたら、ほかの鰻などはとても口に入れられたものではない。いや、そんな話をしてゐると、口から涎が流れさうになつて来る。早くあの娘がくれればいいが……。

甲。 けふもやつぱり休みかな。  
丙。 人をじらすにも程があるぞ。

乙。 貴様達があまりなぶるので、あいつ腹を立つて、もう來なくなつたのではあるまいかな。

甲。 丙。 そんなこともあるまい。

(三人は待侘しげに向うをながめてゐると、向うより帶刀丁は魚賣りの女の手をひいてくる。女は眉目よき娘。手には籠を持つてゐる。)

丁。 さあ、來い、來い。

女。 まるります、まるります。わたくしも皆様に買つて頂くのが商賣。來るなと仰しやつてもまるります。

丁。 (笑ふ) それだから早く來いといふのだ。わからない奴だな。

女。 (おなじく笑ふ) でも、手を曳き合つてゐるは往來の人たちに笑はれます。

丁。 笑ふ奴には笑はして置け。は、は、は、は。

丁。 (丁は笑ひ興じながら女の手をひいて來る。甲、乙、丙の三人は始ましさうに見る。)

甲。 お、魚賣りの女。來たか、來たか。

丙。 けふは遅いではないか。どうしたのだ。

(甲と丙とは待兼ねたやうに女を取りまく。乙も進みよる。)

蛇を賣る女



乙。

女。

甲。

女。

乙。

丙。

女。

丁。

女。

甲。

丙。

けふばかりではない。この二三日すがたを見せなかつたのは何うしたのだ。

あひにく雨がふりつゞきましたので、この二日ほどは商賣を休んでしまひました。

雨が降らうが、風が吹かうが、おれたちは毎日きつと買つてやるのに、なぜ商賣を休むのだ。雨が嫌ひか。

(すこし曖昧に。)はい。

いや、若い女などは雨風に晒されて歩くのをみな嫌ふものだ。おれもそれは察してゐた。

おれは又、病氣かなどと心配してゐたぞ。

御深切ありがたうござります。

その深切を云へば、おれなどはわざわざ途中まで探しに出たくらるだ。

どなたもありがたうござります。(籠をとり出す。)さあ、さあ。どうぞいつものやうにお召

しくださるませ。

勿論のことだ。器を持つてくるから待つてゐろ。

ほかへ行つてはならないぞ。

(甲、丙、丁の三人は急いで門内に入る。乙だけはあとに残る。)

乙。

女。

乙。

女。

乙。

女。

乙。

女。

乙。

女。

乙。

女。

乙。

女。

いつも大勢の奴等が取りまいてがやく云つてゐるので、お前とはまだしみぐと話した

こともないが、おまへの家はどこであつたな。

片野の片ほとりでござります。

ふた親や兄弟はあるか。

母親とたつた二人で寂しく暮してをります。

(同情するやうに。)なるほど、それは寂しいことであらうな。もう年頃だといふのに、なぜ

早く男をきめないのだ。

わたくし共のやうな者のところへ、好んで婿に来てくれるやうな男はござりませぬ。

なに、ないことがあるものか。おまへほどの美しい娘なら、婿にくる男も、嫁に貰ふ男も、

この廣い都に山ほどある筈だ。

でも、わたくしには少しく望みがござりまして、あきうどや職人百姓に連れ添ひたくは思

ひませぬ。

む。(かんがへる。)

たとひ身柄はどのやうに低くとも、お宮仕へをするほどの人に……。(恥かしさうに。)は、

蛇を賣る女



乙。

わたくし風情の身にも及ばぬ大望でござります。

いや、大望でない。おまへならばその望みも屹とかなふに相違あるまい。(すり寄る。)

れ、おまへの今云つたことは本當か。

(女は黙つてうつむいてゐる。乙は又すりよつて、女の肩に手をかける。)

これ、嘘ではないか。

(低い聲で。)はい。

乙。

ほんたうか、ほんたうか。

(乙はいよく摺寄つて何か云はうとする時、門内より甲、丙、丁の三人は手にく折器や土燒きの皿のやうなものを持ち出て出づ。)

甲。

さあ、いつもだけ呉れ。

丙。

おれにも呉れ。

丁。

おれにもくれ。

(三人は器を出す。)

女。

はい、はい。

甲。

(女は籠のなかより魚の肉を細く切りて炙りたるを取り出して、めい／＼の器の上にならべる。そのあひだに乙も急いで門内に入る。)

(その一切をつまんで見る。) けふのは取分けて肉が厚くて旨さうだな。これはやつぱり釣るのかな。

女。

わたくしもよくは存じませぬが、釣るのもあれば築で捕るのもあるとか云ふこととござります。

丙。

さうだらうな。(これも肉を摘んでながめる。) 二三日振りだから猶さら旨からう。それ、錢をやるぞ。

女。

ありがとうございます。

(丙は錢をわたせば、女は會釋してうけ取る。甲も錢をやる。)

丁。

(女に。) これ、氣の毒だが、おれはけふは錢がない。あしたまで貸してくれ。

女。

はい、はい。よろしうござります。

(甲と丙とは眼をひからせて丁をみる。丁は得意らしい顔をしてゐる。)

丙。

(烏帽子の紐を片手で結び直さうとする。) はて、片手に器を持つてゐるので、どうも思ふやう

蛇を賣る女



女。丙。

に烏帽子の緒がしまらぬ。失禮ながらわたくしが結んで進ませませう。

(よろこんで。) おゝ、おまへが結んでくれるか。頼む、たのむ。

(丙は片手に器を持ちながら顔をつき出せば、女は立寄つて烏帽子の緒をむすんでやる。甲と丁とは妬ましさうに見てゐる。)

丙。甲。

(首をふつてみる。) むゝ、しまり工合が丁度いゝぞ。ありがたい、有難い。

(片手に弓、片手に器を持ちながら。) やれ、困つた。おれはこの通り両手が塞がつてゐるのに、生憎に太刀の緒がゆるんで来た。(附太刀をぶらりと振つてみせる。)

では、わたくしが締め直して差上げませう。

女。甲。

おゝ、たのむ、頼む。

(甲は両手をひろげて突つ立てば、女は立寄つて太刀の緒をしめ直してやる。丙と丁はちつと見てゐる。門内より乙は器を持ち出て出づ。)

乙。女。

さあ、さあ。早くおれにも賣つてくれ。はい、はい。(魚を出してやる。)

乙。女。乙。女。

(摘んでかぐ。) むゝ、堪らなく好い匂ひだな。それ、價を取らせるぞ。(錢をやる。)

毎度ありがたうござります。では、皆さま。もう歸るか。

また明日も買つて頂きます。

(女は笑顔をつくりて、甲、乙、丙、丁に一々叮嚀に會釋して下のかたへ立去る。四人はあとを見送る。)

甲。

(ひとり言のやうに。) あいつ、まつたく可愛い奴だ。

丙。丁。

(やはり獨り言。) 美しいものだ。

乙。

(ひとり言。) 深切な奴だ。

甲。

(乙は黙つて聴いてゐる。やがて丙の烏帽子に眼をつける。)

はて、をかしい。貴様の烏帽子はひどく曲つてみえるぞ、なぜ又そんな不思議な被りざまをしてゐるのだ。

丙。甲。

そんなにをかしいか。(烏帽子を撫でる。)

甲。

なるほど、これはをかしい。貴様の烏帽子はまるで突ん曲つてゐる。はゝあ、あの女め。

蛇を賣る女



丁。 いたづら半分にわざとゆがめて着せて行つたのだな。  
 甲。 大方そんなことであらう。はムムムム。  
 丙。 はムムムム。

(笑はれて丙はむつとする。)

丙。 何をそんなに笑ふのだ。(甲の太刀を指さす。) さういふ貴様の腰のまはりをみる。肝心の太刀がまるでうしろの方へ廻つてゐるではないか。はムムムム。

丁。 なるほど、これも不思議だな。では、貴様もあの女にいたづらをされたのか。これは面白い。はムムムム。

丙。 はムムムム。

甲。 (これもむつとする。) え、やかましい。なにが面白いのだ。

丙。 そんなら貴様はなぜおれの烏帽子を笑つたのだ。

甲。 をかしいから笑つたのに不思議があるか。

丁。 どつちもどつちだ。はムムムム。

丙。 (丁の方に向き直る。) いや、貴様も怪しからん奴だ。大きな聲で人のことが笑へた義理か。

丁。

甲。

物賣りの女に拂ふ錢さへなくて、一時借りを頼むなどは、帯刀の陣の面よごしだぞ。なに、帯刀の陣の面よごしだと……。無理にでも取りはしまし、相對づくの貸借りがなんで悪い。なんでそれが我々の面よごしだ。仔細をいへ。いや、貸借りは先づいとしても、ひる日な女の手をひいて往來のまん中を巫山戯あるくなどとは、まつたく帯刀の陣の面よごしだ。貴様達のやうな奴等と一緒に勤めてゐるのは迷惑だ。(丙と丁に。) みんな出て行つて貰はう。

丙。 なに、おれにも出てゆけ……。

甲。 そんな突ん曲つた烏帽子をかぶつてゐる面を見るのも癪だ。あいつと一緒に出てゆけ。

丁。 帯刀が大切の太刀をうしろへぶら下けてゐる、そのさまは何だ。それこそ帯刀の面よごしだ。

甲。 うしろにあらうが、前にあらうが、いざと云ふときに抜かうと思へばすぐに抜けるのだ。(太刀をぬく。)

丙。 (前に出て止める。) これ、あぶないぞ。まあ、待て、待て。

乙。 そんな竹べらを振りまはして、斬れるものなら斬つてみる。(同じく太刀に手をかける。)

丙。 蛇を賣る女



乙。

はて、貴様まで一緒にぬいて何うするのだ。

丙。

どうするものか。ふだんから癩に障るこいつらを片端から斬つてしまふのだ。(太刀をぬく。)

丁。

では、おれも斬る氣か。(これも太刀をぬく。)

乙。

喧嘩がさう入り亂れになつては何うにもならぬ。まあ勘辨しろ、勘辨しろ。

甲。

いや、もう勘辨はならないぞ。相對づくであの女から借りたものを、こいつ等がみんなで難癖をつけて、帯刀の面よごしだなどと云ふからは、おれの方にも料簡がある。女と一緒

丙。

にあるいたのが何でわるい。口惜くばおれの眞似を試してみろ。

甲。

こいついよく、不埒な奴だ。もう貴様のやうな奴等と口のさきの争ひは無益だ。この太刀がおれに代つて物を云ふからさう思へ。(立ちかゝる。)

丙。

え、待て、待て。あいつを斬る前に、先づこつちの埒をあけてゆけ。突ん曲つた烏帽子

丁。

が癩に障るなら、この烏帽子の臺を取拂つてくれ。

甲。

望みならば取つてやるわ。

丙。

(丙を押退ける。)え、邪魔をするな。そいつはおれが相手だ。

乙。

(三人は同時に太刀をふりかざす。)

三人。

(遮る。)いけない、いけない。こゝではいけない。

乙。

貴様も邪魔をするな。邪魔をするわけではない。もう斯うなつたらお互ひに意地づくだ。おれも無理に止めはし

丙。

ないが、なにを云ふにもこゝは場所が悪いぞ。

甲。

(三人もすこし躊躇する。)

乙。

こゝで果し合ひはあまりに恐れ多い。遠い野原か河原へ行つて、そこで尋常に勝負をする

丙。

がよいではないか。

丁。

なるほど、こゝは場所がよくない。では、北野へ行かう。

乙。

北野へ……。それもよからう。おれも同意だ。北野へ行かう。

甲。

行かう、行かう。

丙。

(甲、丙、丁は太刀を一先づ鞘に納め、足早に下のかたへ立去る。)

乙。

は、馬鹿な奴等だ。あいつら三人は同士撃か。たとひ一人が運よく生き残つたところで、

蛇を賣る女



そのまゝ無事に済むわけのものでない。さうすれば女はおれのひとり占めだ。うまい、うまい。

(甲は下の方よりあわたましく引返してくる。)

甲。これ、貴様も来てくれ。

乙。おれは喧嘩の仲間ではないぞ。

甲。いや、後日の證人になつて貰ふのだ。

乙。そんなことに證人がいるものか。

甲。さう云はずに、まあ来いと云ふのに……。(無理に乙の手をひく。)

乙。おればかりではない。みんながさう云つてゐるのだ。

(よろけながら。) どうも困るな。堪忍してくれ、堪忍してくれ。

甲。まあ、来い、来い。

(甲は無理無體に乙をひき摺つてゆく。舞臺暗轉。)

北野の原、あき草が一面に生ひしげる。そのあひだに大きい立木も二三本あり。蟲の聲きこゆ。

(上のかたより前の場の甲、丙、丁の三人が芒をかき分けて出づ。あとより乙も出づ。)

甲。(すぐに太刀をぬく。) さあ、来い。

丙。丁。むゝ。(同時に太刀をぬく。)

乙。まあ、待つてくれ。おれを無理にこゝまで引張り出して来た以上、貴様達もおれの助言をきいて呉れなければいけない。三人が一度に斬合つては、どれが敵だか味方だか判らなくなる。先づ二人が勝負をつけてしまつて、その残つた者とあとのひとりが勝負をすることにしたら何うだ。

丙。なるほど、それがいゝかも知れない。三人ながら敵同士だからな。

乙。それにしても、その順番はどうきめるな。

乙。おれが今こゝで鬨をこしらへてやる。

(乙はそこらを見まはして、三本のあき草を取つてくる。)

乙。(草の片端を握りながら。) さあ、この三本の草のうちで、一番長いのを引いた者があとに残るのだ。

蛇を賣る女







乙。これ、これ、おれをどうしてくれるのだ。(泣聲になる。)俺はもう一足もあるかれないと云ふのに……これ、たのむ。後生だから誰か負つてくれ。

甲。貴様を負つて行かれるものか。

乙。では、手をひいてくれ。拜む、拜む。

丁。困つた奴だな。(甲に)貴様も手をかしてくれ。

(甲と丁は乙の手をひき、四人は氣味わるさうに歩き出さうとする時、下のかたの芒の奥にて唄の聲)

(きこゆ。)

唄。おまへ午年、わたしは巳年、おまへ跳ねても、わしやからむ。

(四人は立ちどまりて耳を傾ける。)

唄の聲がきこえるな。

女の聲らしいぞ。

丙。しかも若い女の聲らしい。こんなところへ平氣で唄ひながら來るのはえらいな。

丁。唄。わしの商賣、彼岸が境、ひがんすぎたら寝て暮らす。

乙。なんだか聴いたやうな聲だ。

甲。なにをしてゐるのだらう。

丙。こゝらが蛇の巢だといふことを知らないとみえるな。

丁。もし、もし、姐さん。

(聲をかけられて女は顔をあげる。四人は笠のうちを覗いておどろく。女もおどろく。)

やあ、魚賣の女か。なんでこんな所をうろ付いてゐるのだ。こゝらは怖ろしい蛇の巢だぞ。

(曖昧に。)はい。

無暗にそこらを叩き立てると大變だぞ。藪をたゝいて蛇を出すといふのはこの事だ。用心

しろ、用心しろ。

(迷惑さうに。)はい。

おまへは一體こゝへ來て何を探してゐるのだ。

(女は困つた顔をして、だまつてゐる。)

蛇を賣る女



乙。

どうもをかしいな。あれからすぐにこゝへ来たのか。

甲。

いま唄つてゐたのはお前だらう。もう一度唄つて聴かせないか。

女。

皆さまの前では唄へませぬ。

丁。

なにしろこゝらは若い女の來るところではない。おれ達でさへも逃げて行かうとするところだ。ぐづくしてゐないで、さあ一緒に來い。

甲。

(丁は立寄つて女の手を取らうとすれば、女はしりこみする。甲と丙は丁を押退ける。)

甲。

えゝ、貴様はまた手を出すのか。引込んでゐる。さあ、おれが連れて行つてやるぞ。(女の手を取る。)

丙。

(甲を押退ける。) 貴様も邪魔をするな。この女はおれが連れてゆくのだ。

丁。

えゝ、貴様たちの知つたことではない。

(甲、丙、丁は互ひに争つて女の手を取らうとする。女は迷惑さうに逃げようとする機に、持つてゐる籠を取落とす。籠の中から死んだ蛇が二三匹轉げ出すに、甲、丙、丁はびつくりして飛び退く。その隙をみて、女は手早く落ちたる籠を拾ひあげ、芒をかきわけて逃げ去る。四人は呆れて顔を見あはせる。)

乙。

(俄に叫ぶ。) あ、大變だ、大變だ。

三人。

どうした、どうした。

乙。

(ふるへ聲で。) あ、あの女め。毎日こゝから、へ、へびを捕つて來て……。お、おれたちに賣つてゐたのだ。

丙。

小さく切つてあるので氣が注かなかつたが、今の様子ではどうもさうらしいな。

甲。

うなぎにしては膏が強過ぎると思つたが、まさかに蛇とは知らなかつた。

丁。

いや、どうも……。あいつ、蛇よりもおそろしい女だ。

乙。

(眞青になつて。) お、おれは……。ま、毎日、あ、あの女に……。へ、へびを食はされてゐたのだ。あゝ、おれはもう死にさうになつて來た。

(乙は殆ど喪心したやうにぐたぐたと倒れかゝるを、甲、丙、丁はあわて、介抱する。)

幕



昭和五年八月十三日印刷  
昭和五年八月十六日發行

綺堂脚本集第十四卷  
(定價金貳圓參拾錢)

著者 岡本敬二

東京市日本橋區通三丁目八番地

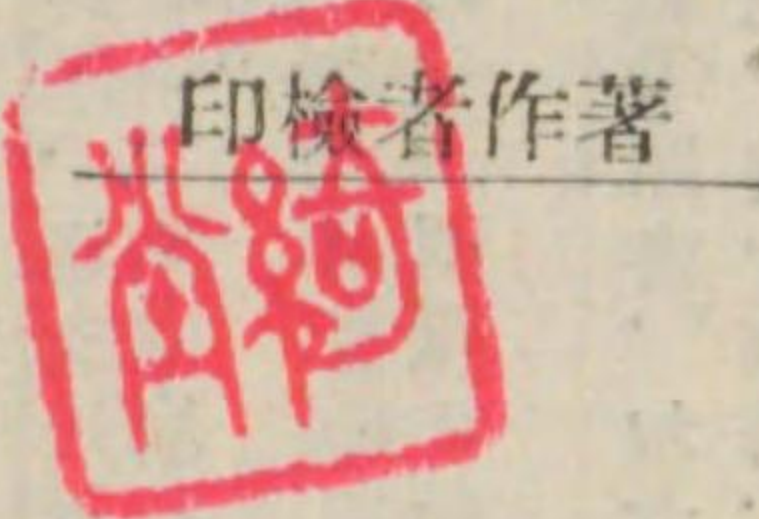
發行者 和田利彦

東京市日本橋區通三丁目八番地

印刷者 木呂子斗鬼次

東京市小石川區諏訪町五十六番地

印刷所 常磐印刷所



著者檢印

發行所

東京市日本橋區通三丁目八番地  
(電話日本橋五・六四一・三七八八)  
振替口座東京一六一七

春陽堂





# 綺堂 戲曲集

■ 四六判布装  
■ 各冊四百五十頁  
■ 各定價貳圓參拾錢  
■ 各送料拾貳錢

第一卷	室町御所、切支丹屋敷、俳諧師、熊谷出陣、鳥邊山心中、名立崩れ、修禪寺物語、わが家、能因法師。	第八卷	前太平記、尾上伊太八、小坂部姫、亞米利加の使、簾の梅、白虎隊、二枚繪双紙、兒が淵。
第二卷	勾當内侍、雨夜の曲、貞任宗任、番町皿屋敷、入鹿の父、兩國の秋、蟹満寺縁起、小栗栖の長兵衛。	第九卷	薩摩節、無禮講、増補信長記、明智光秀、黒船話、武田信玄、唐人塚、景清、三巴雪夜話。
第三卷	西南戦争開書、お七、頼家阿闍梨、清正の娘、戦の後、遊女物語、京の友禪、郡邸、寺の門前	第十卷	小梅と由兵衛、振袖火事、佐渡の文寛、鎌倉の一夜、虚無僧、承久繪卷、義貞最期、隅田川心中。
第四卷	品川の臺場、浅茅ヶ宿、眞田三代記、浪華の春雨、なごその關、平家蟹、新朝顔日記、近松門左衛門、自來也。	第十一卷	黄門記。權三と助十。勘平の死。お化師匠。風鈴蕎麥屋。筑摩の湯の六篇を収む、作者の筆益々圓熟し卑俗なるものに取材して自由自在。
第五卷	大阪城、蒙古襲來、籠釣瓶、楠、弟切草、佐々木高綱、御影堂心中、曾我物語、仁和寺の僧。	第十二卷	五右衛門の釜。正雪の二代目。牡丹燈記。三河萬歳。水野十郎左衛門。時雨ふる夜。新宿夜話の七篇すべて舞臺技巧の妙を盡す。
第六卷	家康入國、長曾彌虎徹、城山の月、箕輪の心中、板倉内膳正、阿蘭陀船、小笠原島、酒の始。	第十三卷	相馬の金さん、水滸傳、雁金文七、長柄の人柱おさだの仇討、雷火、江戸子の死の以上七篇を収む。
第七卷	村井長庵、長恨歌、階級、小田原陣、天の網島、細川忠興の妻、べらぼうの始。		

以下續刊

## 松 戲曲集

著翁松居松

第一卷  
第二卷

茶を作る家、阪崎出羽守、老松若松、堀川夜討、應舉と蘆雪、江藤新平。  
乃木將軍、和泉式部、和宮様御使、尾形光琳、卑怯者、大磯小磯、一つ家、暮の二十一日の八篇すべて上演高評を博したるもの。

四六布装美本  
各冊 二五〇  
送料各 三

四六版紙装  
定價四十錢  
送料四錢

(1) 悲しき遍路  
(2) 暮れがた  
(3) 盲の高利貸

長田幹彦著  
久保田万太郎著  
長田秀雄著

(4) 炭坑の中  
(5) 最後の接吻

小山内薫著  
吉井 勇著

各放送局よりアナウンスして好評を擅にしたる傑作のみを輯む。

## 小山内薫 戲曲全集

著薰内山小

第一卷  
第二卷

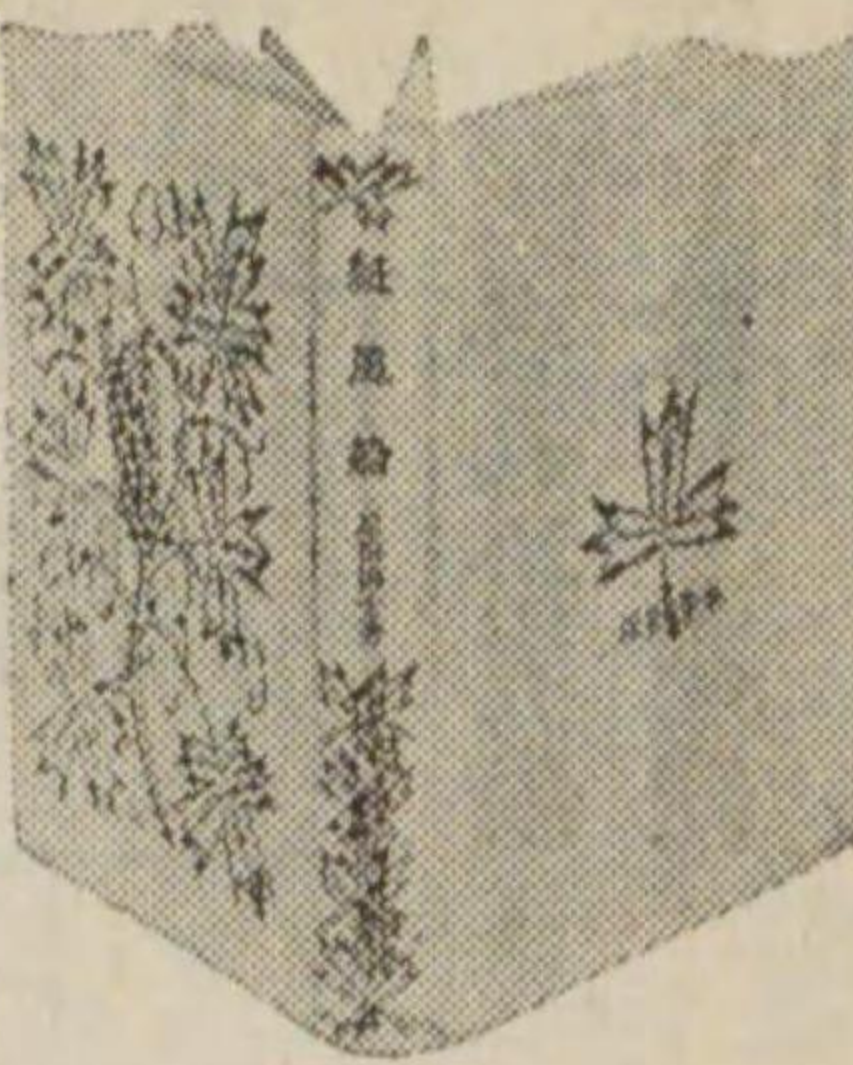
俊寛、新緑、第一の世界、ベテスダの池、三人と三人、捨兒、許嫁、西山物語、伊左衛門、與三郎、傾城淺間獄。  
亭主、奈落、吉利支丹信長、賊、ある敵討、シネマトグラフ、吉田御殿、緑の朝、塵境、息子。

四六判洋布装  
第一卷 二、三〇  
第二卷 二、一〇  
送料各 三



戯曲

中村吉藏戯曲集	相戀記	乃木將軍	處女の死	大雀命	楊貴妃	鑽られた火	桃華娘	桃花扇
中村吉藏著	藤森成吉著	松居松翁著	倉田百三著	倉田艶子著	番匠谷英一著	吉田泰司著	伊吹山直子著	山口剛著
四六判 特紙裝	四六判 紙裝	菊半截 紙裝	四六判 布裝	四六判 布裝	四六判 布裝	四六判 布裝	四六判 布裝	四六判 特紙裝
二二〇	一三〇	八〇	二二〇	一八〇	一九〇	二二〇	二二〇	三三〇
星亨、豫言者日蓮、檻の中、支那の王女、獅子に喰はれた女、以上の六名篇を収む。	相戀記。散彈。桃の木。田園騒動。のれん一重。鳥の足。偽造株券。親友。鈴の感謝。山蟹。速力黙示録等十四篇、すべて發表以來上演喝采を博す。	此戯曲が一たび歌舞伎座の脚光に接するや観客に殺到は實に驚くべきものがありました。それにつけても將軍夫妻の徳が彌高く偲ばれます。	處女とはマリヤの事である。自分は聖母の觀念を以て此作のモチーフとなしたと著者は云ふ。	百三氏の妹君の脚本である。その本質的な點に於て今この日本の作家に珍らしいものがある。	支那史上我々の戲曲的感興をそゝる唐の玄宗皇帝と安祿山と楊貴妃との三角關係を描きて、讀者をして惻々たる情にむせびしめるものがある。	佛陀の妻、森の夜、ある神の旅の三篇を収む。倉田氏の推薦の藝術道場叢書の一として戯曲を集めたもの、文壇に例少き特色あるものである。	若芽のやうな初々しい柔さと感じ易い合歡の嫩葉の羞恥と素直で傷つき易い處女の内は、桃華娘、石になつた媛、荒野の誘ひの中にこもる。	傳奇一卷難解にして蓋し讀者すら稀、今四十餘齣の大戯曲をさながらの姿態に移植する者は著者を描いて天下また人を見ず。藝術的名譯。



現代戯曲全集

新劇の進運を醸したる代表的名作を厳選したものが本叢書である。さきの小説に於ける名家傑作集の叢書と共に、我國文運の發展消息を知るに必讀欠くべからざるものである。

△菊半截 布裝  
△紙數約三百二十拾頁  
△定價各壹、貳拾錢  
△送料各 拾貳錢

現代戯曲選集

石山開城記	紙風船	亭主	母親	熊谷蓮生坊	生きてゐる小平次
長田秀雄	岸田國士	小山内薫	關口次郎	山本有三	鈴木泉三郎
地蔵教の由來	冬	男達ばやり	鬼坊主清吉	阿國出世	
久米正雄	久保田万太郎	池田大伍	岡本綺堂	額田六福	











江戸繁昌記

佐藤進一篇

特紙裝

二七〇

新漢文を以て書かれたる名著江戸繁昌記を流麗なる現代文に譯出せるもの。文化燦然たる江戸八百八街の太平の佛は浮彫の如く躍如たり。

小咄選集

宮川曼魚著

特紙裝

二〇〇

本書は著者多年の趣味蘊蓄を傾けて、一粒選りである。江戸小咄をさらさらと清新温雅の装釘。

東海道中膝栗毛輪講 上巻

四六判

三三〇

江戸研究の大家共古、竹清、若樹、鳶魚等十數氏の興味津津たる輪講である。斬新なる思付權威ある所見、口語方言の吟味真に劃期的研究。

西鶴好色一代男 (全八卷)

四六判

各〇七〇

此度は西鶴だ。難解なる一代男の謎が快きまで氷解して挿繪又稀觀の原本よりの直接複寫。

西鶴好色一代女 (全六卷)

四六判

各〇七〇

江戸の昔に立迄つて懐しく讀まれる一代女はこの外にない。西鶴の如き特異の時代的作品はかうした會合の中にこそその真味がにじみ出る。

琉球戯曲集

伊波普猷篇

四六判

三八〇

能、組唄ならびに初期歌舞伎劇と琉球戯曲との交渉に興味を持つる人士の見逃すべからざる文献内容實に三十五篇。折口信夫氏の序文を附す。

古代篇 平安朝時代小説、鎌倉時代小説、室町時代小説、散逸物語目録

近代篇 假名草紙、浮世草紙、讀本、寫本軍記

江戸時代小説 脚本 淨瑠璃 筆

尾崎久彌著 江戸時代の名作名著の多くは明治大正期に先輩の手によりてその原本普及化が或は活字本に或は複製本に種々計てられてゐる。我等の沙獵欲はまづ是れから出發する。この簡易にして實用的なる索引こそ先づ必要なる備え品である。

本堅製五百頁 紙數五圓五十錢 菊判定價五圓二十錢 朝倉無聲著

日本小説年表

本書は日本文學研究家にとつて最大の羅針盤、久しく絶版となつてゐたものを今度大増訂を加へて成れるもの。

定價三圓 送紙料八錢 菊判紙數八百一十頁



527  
16



